会　議　名	令和５年度第１回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事　務　局	市民部　コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開　催　日　時	令和５年５月１９日（金）１８時３０分～２０時００分		
開　催　場　所	市立はけの森美術館　多目的講義室		
出　席　委　員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 原田隆司委員 坂井文枝委員 加藤治紀委員 中川法子委員		
欠　席　委　員			
事　務　局　員	コミュニティ文化課文化推進係　　津端　佐原 同　　はけの森美術館学芸員　中村、河上、西尾 同　　はけの森美術館学芸顧問　河合		
傍　聴　の　可　否	可		
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由		傍聴者数	０人
会　議　次　第	（１）事業報告等 （２）意見交換 （３）その他、次回日程調整等		
会　議　結　果	別紙のとおり		
会　議　要　旨	別紙のとおり		
提　出　資　料			

【鉄矢会長】　　皆様、こんにちは。本日は御多忙の中お集まりいただき、誠にありがとうございます。ただいまより、令和５年度第１回小金井市はけの森美術館運営協議会を開催いたします。

今日は傍聴の方が１名いるということです。特に守秘義務とか何かあるものではないので、公開の中でそのまま進めたいと思います。よろしくお願いします。

では、配付資料の確認を事務局のほうでお願いいたします。

【事務局】　　ありがとうございます。まず、お机に次第が１枚と、あと資料のナンバー１、２、３がちょっと２つあるような状況なんですけれども、資料１がホチキス留めの、実施した展覧会・教育普及事業等（報告）というものが１点、あと横向きになっているもので、資料２というふうになっているスケジュール表が１枚、あとアンケートがその間に資料３として入りまして、今予算のほうのものが資料４ということでお願いいたします。

あとはお手元に「うるおうアジア　―近代アジアの芸術、その多様性―」の図録と、前回の委員会に御出席の方には会議録をお手元に置かせていただいておりますので、よろしくお願いいたします。

以上です。

【鉄矢会長】　　ありがとうございました。

では、次第の順番で行くんですよね。展覧会１、次第１、これはもう皆様御覧になっていただいたということで、次の議題に進ませていただきます。

（２）の人事について、事務局のほうから委員の人事の報告をお願いします。

【中川委員】　　中川です。

それでは、４月１日付の人事異動について御報告させていただきます。

前任の河田コミュニティ文化課長が４月に異動になりまして、後任として私、中川法子がコミュニティ文化課長兼美術館の館長として着任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

人事報告は以上になります。会長、よろしくお願いいたします。

【鉄矢会長】　　第１回目でもありますし、館長が初めて委員になってこちらに出てきていらっしゃいますので、お１人ずつ自己紹介をということなので、加藤先生のほうからこう回って。

【加藤委員】　　小金井市教育委員会学校教育部指導室長の加藤と申します。よろしくお願いいたします。

【山村委員】　　東京都美術館学芸担当課長の山村と申します。

９年間に東京都美術館のほうに移ったんですが、その前は府中市美術館にいたということで、お隣だということで親しみを感じております。よろしくお願いします。

【鉄矢会長】　　会長、座長をやっております東京学芸大学美術・書道講座で、今は講座主任もやっている鉄矢と申します。デザインを教えております。よろしくお願いいたします。

【原田委員】　　原田隆司と申します。公募市民の１人でありまして２期目になります。美術館ファンの１人として、いろいろと勉強させていただいています。よろしくお願いいたします。

【坂井委員】　　原田さんと同じ時期に市民公募の運営委員になりました坂井です。よろしくお願いします。

【鉄矢会長】　　あとは大丈夫ですね。

それでは次第に戻りまして、（３）事業実施報告ということで、事務局のほうから説明をお願いいたします。

【中村学芸員】　　学芸員の中村でございます。

では、実施した展覧会・教育普及事業等につきまして、私から報告させていただきます。

まず、所蔵作品展、先ほど皆様に観覧いただきました「所蔵作品展　海と画家との説話性―海をめぐる中村研一の物語―」ですけれども、こちらは令和５年３月２６日から５月１４日までの会期で開催いたしました。会期は終了いたしましたけれども、まだ撤去の作業を行っておりませんので、本日は展示を御覧いただきました。

来館者数ですけれども、こちらは日程が３月２６日から５月１４日となっており、一部の会期が令和４年度のほうに入っておりますので、こちらのほうに記載しております来館者数は、令和４年度、令和５年度の年度をまたいだ総計になっております。トータルといたしましては、こちらに記載がございますように１，１９５人となっております。

このうち免除一般と免除小・中というのは、小金井市立南小学校の鑑賞教室が昨日ちょうど行われまして、こちらの人数を足してトータルの人数を出しております。

招待券の２５２人、こちらは令和５年の２２４人という数、ここは最終日の無料開館日についての人数を含んでおります。

関連企画といたしましては、（１）ギャラリーコンサート。こちらは事前の申込みで、主催小金井市役所コミュニティ文化課という形で行われたものです。

会期といたしましては３月２６日からでしたので、こちらのギャラリーコンサートは会期の１日前に行われたという形で開催しております。

定員４０名で、こちらはコロナ渦よりも前はギャラリーコンサート５０名で定員をとっていたんですけれども、密集を防ぐという形での感染対策といたしまして、１０名減らした４０名を定員として、抽せんで応募者の中から４０名を選んで、事前に申し込んでいただいてギャラリーコンサートを行うという形で行われました。

ただ、当日天候があまりよくなくて非常に寒かったということで、当日キャンセルが６名いたということで、結果的には３４名の方が参加してくださって、マリンバによるギャラリーコンサートを聞いていただきました。事前に奏者の方には、展示の内容なんかもお伝えをしておいて、海に関する曲を選んで演奏してもらうという、そういう内容になっておりました。こちらはギャラリーコンサートの後に、ちょっと規模を縮小したギャラリートークも一緒に行っております。

２番目は、読み聞かせとワークショップ「海とわたしの物語」という、こちらは子供向けのワークショップでございます。

３月２９日に地元の児童文庫「こごうちぶんこ　ことりのへや」の皆さんに講師をお願いしまして、絵本の読み聞かせと制作から成るワークショップとして開催いたしました。

まず展示を見に行って、その後、ここの部屋を使ったんですけれども、この部屋に戻ってきて、絵本の読み聞かせをしてもらう。ここも「こごうちぶんこ　ことりのへや」の皆さんに事前に海にまつわる展示ですということをお伝えしておりまして、海に関する絵本というのを「こごうちぶんこ　ことりのへや」の皆さんに選んでおいてもらっていたんですね。その上でそういうイメージを膨らませて、絵の具を使ってイラストボードにそのイメージを描いていくという、そういう内容になっております。

こちらは申込み不要としたんですけれども、感染対策といたしまして、あまり人がぎちぎちになってしまうとよくないということで、１５組程度の先着受付という形で受け付けました。結果としましては、１１組、大人１１人に対して子供が１４人という形で参加者がありまして、１５組には届かなかったんですけれども、ただ、これでもう部屋の中がかなりいっぱいになっておりましたので、数としましてはちょうどいいぐらいの数で、参加者がこれ以上いるとちょっと密集したかなという感じになっていました。

非常に活気のある状態でして、参加者アンケートのほうが資料３になっております。１１組だったのに対して回収枚数が９枚なんですけれども、これは結構ぎりぎりまで制作に

夢中になってくれた子が多くて、アンケートを書いている暇がなかった、最後まで絵を描きたいという子が多かったんで、全員からアンケートを回収するというのができなかったんですけれども、ただ感想などを見ますと、やっぱり絵の具を使う機会がなかなかない、家だと特に体についちゃったりとかというようなことで、自由に思い切り絵の具を使える機会がないというところで、ここで使えて面白かったという意見が結構多かったですね。

もともと未就学児から小学生までという形で、子供向けとしましても少し年齢としては低めのところを想定していたんですけれども、実際にやってみたら、未就学というか、未就園というんですか、２歳とかそのぐらいの子も来ていまして、結構逆にもう絵の具を絵の具として認識できるかぎりぎりぐらいの子もいたりしたんですけれども、ただそういう子でも割と絵の具の感触を楽しんで、手で触ってべたべたとイラストボードに思い切り塗ってくれたりして、そういうところで特に保護者の方からは、意外とそういうのが良かったという感想が来ております。

（３）中村研一の誕生日を記念した無料開館日です。関連企画ですけれども、ここは例年、年度をまたぐこちらの所蔵作品展の時期に、５月１４日に近いところでずっと行ってきた無料開館日です。ただ、今年は５月１４日当日が、ちょうどぴったり会期の最後に当たっておりましたので、ちょっとそこで何か記念になるようなものがないかなということで、以前作ったステッカーがございましたので、今年は無料開館日に来てくれた人に、記念にステッカーをプレゼントするという形で、ちょっと記念日っぽく演出をいたしました。１５６人の来館者がこの日あったという形になります。

（４）は担当学芸員によるギャラリートークで、こちらはここまでのイベント、特に１番と２番のギャラリーコンサートと子供向けのワークショップが３月の時期に集中していましたので、ギャラリートークのほうは年度を改めた４月以降のところに設定をして２回行っておりまして、４月２２日と５月１３日に行いました。

それぞれ４月２２日は１１人の参加者、２番目の５月１３日が７人の参加者という形になっております。

こちらの展示のアンケートにつきましても、展示自体のアンケートという形で実施をしたんですけれども、今回はアンケートの配布方法を来館者の受付のところでそれぞれ１枚ずつ手渡しをするという方式に切り替えましたところ、２６６枚集まりまして、非常に枚数が多くて、今、集計中でございます。集計が終わり次第、また改めて報告させていただきます。

続きまして、教育普及事業のほうに関しましても、この会期中に行われたものにつきましては、私から報告させていただきます。

先ほど申し上げましたように、鑑賞教室を昨日、令和５年５月１８日、小金井市立南小学校の４年生が来てくれて行われました。全４クラス、各２８名で、会期が終わっておりましたけれども、展示をそのままにしておりましたので、それぞれのクラスに順番に来てもらって、午前中に３クラス、午後に１クラスという形で観覧をしてもらいました。

昨日は天気もよかったので、１階と２階の展示室を見てもらって、その後に、せっかくだから緑地のほうにも回ってもらって、緑地を一周して、建物の様子なんかも外から眺めて帰るという形で、結構遠足みたいな感じで来てくれました。

実施した展覧会と教育普及事業についての報告は以上となります。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

説明が終わりました。何か質問、意見等がありましたらお願いします。

【坂井委員】　　美術の本題とは関係がないんですが、市役所の方にお聞きしたいのは、小金井市立南小学校は各２８名ということですが、小金井市では１クラスがこんなに少ないんですか。ちょっと本題と違うんですけど。いいんじゃないのと思ってちょっと。

【加藤委員】　　私が答えてよろしいですか。どう説明したらいいかな。１クラスの上限が３５名なんです。例えば１学年の中で３６人子供がいると、３５人を超えてしまうので２クラスになります。

【坂井委員】　　なるほど。

【加藤委員】　　そうすると３６人なので、１８人、１８人になります。そういう考え方になっていますので、マックスが３５人ということで、そのときの切れ方によって、こういうふうになったりします。

【坂井委員】　　こちらが小金井市のクラスの標準というわけではないんですね。

【加藤委員】　　ではないです。

【坂井委員】　　分かりました。失礼しました。本題と違うことで。

あともう一つよろしいですか。今、拝見した展覧会のことなんですが、前回、山村委員からだったと思うんですが、説話性のタイトルに関して御意見があったと記憶しているんですけれども、私も拝見して、すごく面白かったんです。面白かったですし、いい展覧会だなと思ったんですが、やっぱりちょっとタイトルに、見てから違和感がちょっとあったかなというふうに思いまして、会場の分類の第３章にあった追憶の海、このぐらいの簡単

な感じがすっと入ってくるなという感じがすごくしたんです。いろんな形で、戦場、シンガポールの海、新居浜の海、いろんな海を彼は思い出しながら、あるいは現場にある程度いつつ描いたと。小金井の屋敷の中でも、海を追憶しながら御婦人を描いているみたいな、水着との関連の話だとか、タイトルも説明書きも拝見して、すごく追憶の海が私的にはぴったりくるなと思ったので、難しいほうがいいって言うのは変なんですけれども、簡単なほうがいいということもあるのかなというふうに思いまして、すんなり入ってくるという意味では、私はそんなタイトルのほうが、第３章の追憶の海のタイトルがすごくよかったと思います。それをそのまま大きな傘になさってもよかったのかなというふうに思いました。

【中村学芸員】　　ありがとうございます。

実はギャラリートークでは、タイトルのところの補足を置いてギャラリートークをしていたんです。今回、やっぱり説話性という形で、性をつけたというのは、一種の化学反応みたいなものとして、海と画家というものがあったときに何が起きるのかというテーマにしたかったというのも、改めて私の中にあったテーマでしたので、そこのことに言及するというのと、あと具体的なエピソードとして、このときの中村研一とこのときの海の関係ということではなくて、もっと人生全体みたいなものに及ぶテーマとして考えたいなというところがありましたので、そこでどうしても性をつけたかったというところは、これは私自身がこだわってしまったところはある。

【坂井委員】　　多分すごいこだわりなんだろうなと思いました。

学芸員さんのほうが高邁なことを考えていらっしゃるんだろうなと、私なんかはもう拝見して、すっと入ってくるかこないかみたいなことしか考えなかったんで、それは大いに分かりました。

ありがとうございます。感想みたいなことで申し訳ありません。

【鉄矢会長】　　感想も重要な、どういうふうに見たかを直に聞けるのは、この場があるので、ありましたらぜひよろしくお願いします。

【山村委員】　　では感想で、琢二と研一は兄弟関係ですよね。その説明で、お兄さんが船の模型を作って出来がいいので琢二がもらって、けんかしたら返せと言われたという話。それがあの隣の部屋で、１９２８年に研一がヨーロッパ、フランスに行って、最後に描いた絵を琢二さんがもらったのを、ここができるときに返したという、そういうのは面白いなというふうに、分かりやすい、人間らしい、そういうエピソードがすごく面白いので、

よかったと思います。

だから、今、私も同じ感想なんですけど、やっぱりいらっしゃる方が、自分に引きつけて感じられるような、そのようなエピソードも含めながら、タイトルとか、いろんな広報だとかをやっていったほうが、多分もうちょっと分かりやすくて、アピールするんじゃないかなというふうに思うので、その辺は学芸員のこだわりと折り合いをつけなきゃいけないんで、別にこれでいいと思いますけれども、参考にしてもらって、今後に生かしてください。お願いします。

【中村学芸員】　　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　どうぞ。

【原田委員】　　僕は、中村さんのギャラリートークの日に拝見して、解説を聞きながら見ましたので、あまりタイトルの難しいのは気にならなくて、よく分かりました。

大変面白い展覧会で、海と中村研一は、僕が今まで見た絵で想像していたのは、南の海なのに戦艦が浮かんでいて暗いというか、重いというか、そういうイメージがあったんだけれど、一番初めに「窓辺（海）」で果物の絵が出てきまして、何だこんな明るい海の絵を描いていたんだと。そういう意味では、海という切り口で彼の作品を今まで見た部分も含めて、新しい見方ができたという意味ではとっても面白くて、説話性にこだわったって、ひょっとすると中村学芸員と中村研一の関係の説話性というのがテーマで、中村学芸員が新しくこういうふうに光を当てるぞというのを主張された展覧会かなと思って、それはすごくいいことだと思いました。それが伝わってくるんです。

一番それを感じたのは、最後に「木陰」の葉っぱの絵が出てきます。あれは何度も見たことがあるんだけれど、会場には解説は書いていないんだけど、ギャラリートークでは、あの葉っぱの奥にこの庭園の泉、池が、泉でしたっけあの噴水があるところ。あれが書いてあるんですよと。そう見えないこともないなという程度なんですが、だから、人によってはそんなの牽強付会じゃないかと言われるかもしれないんだけど、そこはやっぱり学芸員の中村さんのテーマに沿った解釈ということですね。そこに水がある、そして、あの水は野川をつたわって多摩川に行って海に帰るんだと言われると、本当にその気になって、この物語は完結しているじゃんという感じで、いいと思いました。

だから、ギャラリートークで言うだけじゃなくて、あそこにちょっとそういうことも書いたほうがよかったかなと思いましたね。

以上です。

【山村委員】　　よく調べていますよね。

【坂井委員】　　それはいい話ですね。

【原田委員】　　うん。

【鉄矢会長】　　鉄矢です。私もちょっと感想を言うと、全部をしゃべったほうがいいのか、少し隠しているほうがいいのかなというのが、解説を見ながら、あれ、これ書いていないのは本当かなと思ったり。チャイナドレスのときも、あれはデッキチェアだよなと思って、これ船のデッキチェアだというのをもう少し書いたほうがいいのかなと思って、あれは多分クイーン・エリザベス号とかに載っかっているのと同じパターンの何とかデッキチェアといって、足の部分が延びるやつなんですね。だから、あれも海っぽいなとは思ってはいたんですけど、それは書いたほうがいいのか、書かないほうがいいのか、俺の勘違いなのかなとかいろいろ見ていたのと、あともう一つ、軍艦が並んでいるデッサンというか、白黒のものと油絵のがちょうど線対象なんですね。同じ軍艦を書いているんだろうなと思っていて、この軍艦は何ていう軍艦なんだろうとか、きっと多分軍艦フェチの人はこの３つのあれがあるからどうのこうのとか全部知っているんだろうなと思った。そういう何かリファレンスがしたくなったなと思って。

あとは、新居浜から見える何とか島が５つで１つだというとき、知らないよと、ずっとGoogleMap でこう調べて、これかと思ったら製錬所がまだあったりして。その辺は、もしかしたら皆さんはもう新居浜はここだって知っているから、こういうイメージになるのかもしれないですけれど、やっぱりすぐに新居浜はあの辺だろうなとは思いながら、どこに島があるのその間にというのは思うかなと思って、ちょっとマップがあってもよかったかなと思いましたね。

【中村学芸員】　　そうですね、確かにマップは、今回そういったものを作るということをしなかったので、あったほうが真実味といいますか。やっぱりでもそういうふうに入れ子状に限りない物語があって、そこの部分をどのぐらいこちらのほうで示してしまうのか、あるいは示さないのかという加減は非常に難しいところだなと。

【鉄矢会長】　　だから、手元に今スマホを持っているので、GoogleMap を調べると出てくるので、これかとか思っているのでもいいような気もするし。

【坂井委員】　　何かでも示してほしい感じがします。今聞いたお話は私、全然分からなかったです。

【鉄矢会長】　　そうですか。

【坂井委員】　　デッキチェア。言われてみればデッキチェアかなみたいな。

【山村委員】　　あとは、中村研一の人生、年譜がどこかにあって、そこと海がどう関連しているかということもあったほうが分かりやすかったかなというのは思いました。

【中村学芸員】　　年譜は、実はここの美術館が持っている既存の年譜のパネルがあるんですけれども、今回はちょっと場所がなくて出せなかったので、そこの部分、もうちょっとスペースが確保できるとよかったなと改めて思います。

ちなみに、３本の煙突のある軍艦は神通です。

【鉄矢会長】　　あ、そっか。

【山村委員】　　神通ってどう書くんですか。

【中村学芸員】　　あの、神に通る。

【原田委員】　　神に通る。

【鉄矢会長】　　へえ。神通力の神通なんですね。

【河合学芸顧問】　　元は川の名前です。神通川の。

【坂井委員】　　神通川ね。

【河合学芸顧問】　　あの時代では、艦種により山や川であったり、あるいは戦艦なら旧国名であったり国であったりと分けて。

【鉄矢会長】　　あと、すごい気になったのは、この美術館にある作品の登録情報を同じ学芸員が疑っているというのは、すごく何だろう、登録情報によるとって書いてある、あの言い方が冷たいな、全然信じていないのかなとか思うのか、それとも誰がやったのか分からない登録で、そこのやっぱりリアルがなくて困っているのかなとも思って、そこは学芸員という職業は疑問は大事だと思うんですけれど、普通に見ると、研究所が自分の研究が持っている過去の記録に、何だって言っているようにも見えて、ちょっと不思議な感じがしました。

【山村委員】　　でも、たしか裏がとれないと。

【鉄矢会長】　　だから、裏がとれなくても登録情報になっているということですね。

【中村学芸員】　　そうですね。

【鉄矢会長】　　そうか。ここになる前のときにそういうふうに書いちゃうと。

【中村学芸員】　　情報は一応引き継いでいるので、そこのときに引き継いだ情報が残っているんですね。

【鉄矢会長】　　そうですね、分かりました。

【河合学芸顧問】　　中村家がおおざっぱ過ぎたと。

【鉄矢会長】　　うん。なるほど、分かりました。

【河合学芸顧問】　　文字情報からは憶測できないじゃないですか。だからすぱっとそこで切っちゃうと、冷たいというか。

【鉄矢会長】　　大笑いのシーンがなんかくすっと笑う、どこが大笑いだって、誰が決めたんだって言っているのが。

【河合学芸顧問】　　ですから、「ロブスター」だっけ、わざわざ説明していましたよね。誰が見てもロブスターとイセエビは違うじゃないかって分かっちゃうんで、あえて彼女はそこは説明したと。ほかのもたくさんあるんですけれども、分かっているのよというのと、任せますというのとが。

正直な話、ただ、時間的な問題は、この美術館の展示空間で、今回だけの所蔵品展だけで言えば、この展示室は可動式のパネルは出せますよね。だから、少なくとも面積、展示壁面を増やすことはできたんですけども、最初にコミ文として行うマリンバのコンサートをやることになっているでしょう。そうすると、その空間は必要なわけですよ。それをやってから展示じゃ間に合いっこない。じゃあ、その部分だけ後でというと、展示室のパネルはずっと出ているんで、またやらなきゃいけない部分でという、そのもろもろのことがあって、多分パネルの１つ、２つが減らざるを得なかったのかなと、僕なんかは外から半分見ているんですけれども、ちょっと感じました。

【鉄矢会長】　　マリンバなんかは中庭でやっても面白いかもしれないですね。上に音を向けて。

【中村学芸員】　　ギャラリーコンサートは天気が悪くてすごく寒い雨だったので、中庭でやったらきっと怒られたと思います。

【鉄矢会長】　　楽器を濡らしたらおしまいですからね。

あと、すみません。すごく小さなことなんですけれど、当日キャンセルで音楽家に謝金を払っていて、そのための料金を取っているはずなのに、キャンセルで払えなくなってしまってすごい大変だなと思って、やっぱり前売り制でチケットを売ったほうがいいんじゃないですかという気がするんですけど。

【事務局】　　そうですね。実は、会場は私どものほうでお貸ししているんですけれども、宮地楽器ホールとの共催になりますので、演者さんへの謝礼のほうは宮地楽器ホールのほうで持っていただいていたので。

【鉄矢会長】　　じゃ、大丈夫だ。大丈夫だという表現はおかしいけど。

でも、このチケット代は、宮地楽器ホールさんが取っているということですよね。

【中村学芸員】　　このギャラリーコンサートを含め、一応会場はこちらで。

【鉄矢会長】　　すごい。宮地楽器ホールはＣＳＲみたいなものなんですね。分かりました。何かいつも、駄目だと思って、有料で入れていたのにキャンセルされて、お金が動かなくなってしまったというのはすごくもったいないなと思って、うちの大学でワークショップなんかを有料でやるときは、最初に払い込んでもらってというのをやっていたりするので、その辺もできたら。

あと、最近はやっぱり大学のほうも、Ｇｏｏｇｌｅアンケートをすごく使うようになって、ＱＲコードで渡して、その渡し方がうまければ、その場で答えてくれる。渡し方を失敗すると、そのままポケットに入れて誰も見てくれないんですけれど、結局集計が物すごく楽になるので、それもちょっと御検討いただけると何か楽になるかもしれない。

【中村学芸員】　　集計フォームを作ったんですけれど、まだ全然集計が終わらないので、これからちょこちょこ入れていきます。

【原田委員】　　すみません、もう一つ細かいこと、聞き漏らしたかもしれないんですが、協力Kenichi Masaki Media Lab.は、どんな協力をされたんですか。

【中村学芸員】　　これはチラシのデザインとか、ポスターのデザインとか、今回のパネルのデザインとかを全て、そういう展示に関わるところのデザインを、これは東京学芸大学の正木賢一先生が担当されていまして、今回、正木賢一研究室の表記名として、こちらの表記の希望があったので、これになっています。

【原田委員】　　分かりました。

【鉄矢会長】　　こうなると東京学芸大学っぽく見えないですね。

ありがとうございます。では、（４）番、違うか。

【事務局】　　そうですね。（４）事業予定でした。

【鉄矢会長】　　そうですね。（４）令和５年度の事業予定と予算についてということで、先ほどの続きからお願いします。

【河上学芸員】　　２番担当、学芸員の河上です。

（２）今後の展覧会・教育普及事業等のところを御報告いたします。

１番の企画展、こちらの展覧会名が「笹川治子＜中村研一作品とともに＞　届けられた色」と題しまして、９月２日から１１月５日とかなり長い期間なんですけれども、２か月

間、笹川治子さんという現代作家の方の個展を開催することになっております。

こちらの記載されている情報を見ていただきますと、開館時間が今回の所蔵作品展と同様、午前１０時から午後５時で、休館日が月曜日か火曜日か。資料は少し幅があるんですけれども、月曜日が祝日になる日が二日ほどございますので、今回はそこを開館いたしまして、翌日の９月１９日と１０月１０日の火曜日はお休みとしております。

次のページに参ります。観覧料なんですけれども、一般５００円で、会期中１回のみ再入場可と設定しておりまして、高校生以下及び障害者手帳をお持ちの方は無料という設定で今回はしております。

主催は小金井市立はけの森美術館。今回、この展覧会に関しましては助成金が、すみません、ここが中途半場に。ごめんなさい、こちらで補足させていただきますと、公益財団法人花王芸術・科学財団、公益財団法人朝日新聞文化財団・芸術活動助成というものと、翻訳にかかる公益財団法人小笠原敏晶記念財団、３社の財団から今回この展覧会に係る助成を受けることになっております。

概要に関しましては、こちらにありますとおり、今申し上げましたとおり、笹川治子展と題しておりますが、実際は、笹川治子さんの個展なんですけれども、当館の所蔵作品、中村研一作品とともに、一緒に笹川作品の展示をして見せるというような形をとるものになっております。

今回は、笹川治子さん自身がずっと戦争画というものに着目をして、作品を制作、提供されているという作家さんということも含めまして、当館に中村の戦争画を含む様々な作品があるという前提で、企画の内容を詰めております。

ちょっと今回は、字だけで説明をすると分かりにくいかなと思って、スライドを作成して、皆様に御覧いただけるような形にしたので、こちらのホワイトボードを御覧いただければと思います。

【西尾学芸員】　　本展覧会の副担当を務めております学芸員の西尾です。

「笹川治子＜中村研一作品とともに＞　届けられた色」という展覧会について、内容以外での補足をさせていただきます。

まず、そもそも笹川治子さんという方について、今、河上より説明もございましたが、こちらに来歴を簡単に示させていただきました。

笹川治子さんは、東京藝術大学在学中に安宅賞を受賞されておりまして、その後も現在に至るまで精力的に制作活動を続けられています。個展を自ら開催するだけではなく、主

要な展覧会のほうにも示させていただいた「戦争画ＳＴＵＤＩＥＳ」という展覧会と、「フジタ・トリビュート」と題したこちらの展覧会については、企画の運営段階から関わって、立ち上げているというような作家活動をされております。

今回の展覧会のコンセプトをざっくりと説明させていただきますと、中村研一という画家は戦争画家であるという側面も持っていて、その点について今まであまりはっきりと触れてこないことも多々あったかなというふうに考えておりまして、そこから今回の企画が実は立ち上がっております。

戦争画と一口に言っても、作戦記録画と言われるものから、戦地でのスケッチなど様々にあるんですね。今、この場で話をする上では、そこをまとめてざっくりと戦争画と呼ばせていただきますが、中村研一はそういった作品を描いていた画家であって、当館も実はその主要の作品の一部を所蔵している美術館であるというところから始まります。

一方で、この笹川さんという作家さんと、私たち学芸員が話している間に起こった問題提起として、もちろん戦争画というのは戦争をあおるためのプロパガンダのメディアである、それと同時に、１枚の絵画でもあるという側面に今回は注目していきたいというふうな話になっていきました。つまり、メディアとしての側面と絵画としての側面、２つの側面の間で揺れ動く、どちらでもあって、どちらだけでもないというそういう側面、その不確かさを、展示を通じて示すという試みです。

ここで不確かさをというふうにあえてぼやかした言い方をしているのは、今ここで１００％言葉にして語れないものだからこそ、展示を通じて見守っていただきたいという部分もありますので、そこはちょっと今後も、新作も今回は何点か現在進行形で作成していただいている途中ですので、ぜひ楽しみにしていただければと思っております。

タイトルが少しよく分からないと、先ほどから展覧会のタイトルのほうのチェックがずっとあったかと思うんですけれども、今お話ししたとおり、戦争画には絵画としての側面があります。絵画というのは、やはり画家が何かからインスピレーションを受ける、インスパイアされて、霊感を与えられて製作するという、そういう側面が一つあるかと思います。つまり、画家にイメージが、画家自身が描きたいと思う気持ちもあるでしょうし、画家自身が何かおりてくるものもあるというような側面がまずあるかと思います。

一方で、先ほどお伝えしたように、メディアとしての側面もある。それは画家から人々、または国から人々へ届けるという意味です。特に当館は、軍事郵便に使用された中村研一のスケッチ画を６点か７点ほど所蔵しているということもありまして、今回はそういう側

面に着目して、その結果、「届けられた色」という言葉が出てまいりました。

ちなみにどんな作品かというところで、実は先ほど申し上げたとおり、まだ制作中の作品が多いので、今出せる画像が限られてしまっているんですけれども、この左側の「６日間、夕方から正午まで」というこちらの作品は、２チャンネルの映像作品なんですけれども、こちらは実際「フジタ・トリビュート」という先ほどの展覧会で展示された映像作品で、こちらの写真だけだと分かりづらいんですが、笹川さんが、戦地でこうした草むらの中へ倒れ伏した兵士が、実際にどういった景色を見ていたんだろうといったような着眼点から、その草むらの様子をタイムラプスで写しているという、この草むら自体は戦地ではないですけれども、ある仮想空間として想定して制作した作品です。

また、こちら右は「記録画」というタイトルになっていますが、笹川さんはいろいろな今も、戦争というのは昔の話だけではなくて、第二次世界大戦から今に至るまでもずっと私たちの身の周りにはあって、つまり、戦争を知らない子供たちだという言葉もありますけれど、実際私たちの周りにはずっと戦争があって、そういったものをメディアを通じて見る機会が多いですけれども、例えばそれはテレビであったり、ゲームであったり、ネットの世界だったりする。その中からいろいろなイメージを切り取って、彼女は記録画として制作するという制作のシリーズを続けています。そういった作品を今回、中村研一の作品と対照させるような形で展示するという予定でおります。

今、話した記録画ですけれども、このような形で、ちょっと今の１階展示室に「空の海戦」という作品を今も御覧になったかと思うんですけれども、そういった作品も併せて展示します。

何も言われなければ、ちょっともやもやしていて、一体具体的に何を書いているのか分からないような作品も中にはあるかと思うんですけれども、そういったところが絵画とメディアとのあわいをさまようような作品ということで、中村研一作品の中でもそういったちょっともやもやとしていて、何を描いているのか少し分かりづらいようなものというのを、笹川さんの記録画であったり、映像作品と併せて展示するという予定です。

ほかにも関連イベントとしましては、こちらの資料のほうにも書いてあるんですけれども、ワークショップを行ったり、あとは笹川さんの指導教官でもあった東京藝術大学の佐藤道信先生をお招きしまして特別講演会を行っていただく予定もあります。

また、今回は絵を描く、そして、その絵を見るということが大きなテーマとなっておりますので、こちらも笹川さんにお願いをしまして、手を動かして実際に絵を描くワークシ

ョップも予定しております。

また、笹川治子さんと担当学芸員の河上が展示室を歩きながら、展示室に展示している作品についてお話をしながら、その様子を皆さんに見ていただく、そういうイベントも企画しております。

【河上学芸員】　補足といたしましては、関連イベントに関しまして、資料の関連イベントの３番、参加型のワークショップ、これの関連になるんですけれども、プレイベントといたしまして、会期は９月からなんですが、６月の中旬くらいからアンケート企画といたしまして、参加型ワークショップとリンクするようなアンケートを配布して、それを展示のほうに反映させるといったような試みを今しているところです。

これは具体的には、思い出集めのワークショップ、「思い出のかけらを集めて」というワークショップになるんですけれども、これはワークショップのバージョンなんですが、「思い出のかけらを集めて」というアンケート企画で、参加者の皆さんの一番古い記憶を掘り起こして、それをアンケートに反映させて、そのアンケートをこちらで回収して、今回の展覧会の展示作品のところに、それをまたさらに反映させるというような、そういう試みを今しようというところで話をしているところです。

企画展１については以上です。

【西尾学芸員】　続きまして、もう一つの２つ目の企画展の話に移らせていただきます。こちらの展覧会を担当させていただくのは、学芸員の西尾です。

こちらは前回の会議のときにも紹介させていただきましたが、「うるおうアジア ―近代アジアの芸術、その多様性―」というタイトルで展覧会を行わせていただきます。こちらは一般財団法人地域創造による市町村立美術館活性化事業の一環として、去年度を準備年度としまして、今年度を開催年度として開催する展覧会です。

巡回先はこちらのとおりでして、はつかいち美術ギャラリーで先日５月１２日に総合開会式を行って封切ったところです。その後、四日市市文化会館、上田市立美術館、そしてその後に当館と、どんどんどんどん福岡から北上する形で展覧会が回って、最後は当館での開催となります。

こちらはお手持ちの資料にありますとおり、今年の１２月２日土曜日に始まりまして、年をまたいで１月２８日日曜日までの開催となっております。観覧料は一般５００円、小・中学生は２００円とさせていただいております。

概要としましては、こちらに示しましたとおり、令和４年度、去年度の段階から展覧会

のコンセプトの決定、作品の選定、広報物、それから、今、皆さんのお手元にある図録の作成を去年度行いました。イベントとワークショップについては、現在まだ予定を検討しているところでして、１２月の展覧会ですので、これから予定を立てていくという形になっております。

こちらの展覧会については、どういった経緯で成立したかということについて、簡単に触れさせていただきます。

まず、こちらのスライドに示しましたのは、福岡アジア美術館のホームページから抜粋した福岡アジア美術館の収集方針です。その中にも今回の実行委員会が特に注目したのが、この赤字で示しました、アジアの近現代美術を考える上で重要な、民俗芸術や民族芸術――音だと同じなんですけれども漢字が違います――大衆芸術というのが、福岡アジア美術館の大きな収集方針の特色となっているというところに着目しました。

コンセプトとしましては、近代美術と一口に言うと、当館が所蔵している中村研一がまさにそうなんですけれども、西洋の近代美術の教育を受けた画家による海外彫刻作品を想起する方が少なくないかと思います。例えば西洋の印象派だったり、フォーヴィスムであったり、そういった作品に影響を受けたり、画家が芸術作品を作るという意図を持って描いた、画家のサインがあるように。そういった作品を想起する方が少なくないと思いますが、しかし、福岡アジア美術館が所蔵しているようなポスターであったり、宗教画、輸出用の絵画もまた近代美術を考える上で重要な作品群と言えるということで、いわゆる近代美術という私たちが一般的に言っているような作品群と、ポスター、宗教画、輸出用絵画から、またリキシャ――後でちょっと紹介しますけれども――リキシャまでを同じ会場で展示する試みとして、今回、私は望みました。

例えば、先ほど言ったいわゆる近代美術の枠組みにある作品としては、こちらのスライドに示したとおり、特に左側の作品は、日本で生まれた中国人の画家、リュウ・ロンフォンという方の「満州の収穫」という絵なんですけれども、こちらも今回、当館巡回する作品でして、明らかにポスト印象派の影響を受けている作品で、彼、リュウ・ロンフォンという画家自身も日本で文展を中心に活躍したような画家であります。

真ん中のローチンサンは、中国から台湾に移った写真家なんですけれども、「蘇州へ行く」というタイトルの作品で、一見普通の風景写真なんですけれども、実はこれ空と手前の蘇州の川の流れというのがコラージュで別々の写真を使った、ちょっと独特な近代的な写真の作品となっているんです。

こういった作品は、確かに近代美術として思い浮かべる方が少なくないかなとは思うんですけれども、一方で、今回は、一番左にあるのは、中国で輸出用に撮られた観光客ですとか、仕事として中国に１８００年代に滞在したような方々がお土産として持って帰るような、そういったことを一種の目的として撮られた写真ですとか、真ん中は宗教画の一種です。「ラクシュミーとサラスヴァティー」というタイトルがついています。

一番右はリキシャといって、バングラデシュで今も使われている人力車が日本から伝わって、こんなビニールですとか、プラスチックとか、ブリキとかいろんな装飾が付いた３輪の車です。この後ろの幌の中に人が乗って、前で人が漕いで、実際にタクシーのような形で人を運ぶ乗り物になっています。そういったものも今回一般の展示室で公開するということです。

ちょっと今の流れを見てすごくごった煮というか、いろんなものがくる、取り留めのない展示にも見えるかと思うんですけれども、実は先週の火曜日から金曜日まで、私がはつかいち美術ギャラリーの展示作業にずっと携わってきました。そのときの展示風景を一部お見せしたいと思います。はつかいち美術ギャラリーさんは、当館より床面積自体はとても広いので、かなりゆったりと展示されていまして、ごちゃごちゃっとした印象は少ないかと思うんですけれど、左側が主に最初にお話しした近代美術と呼ばれる作品があります。右側には、現代美術に該当するんですけれど、ヘリ・ドノという作家の「バッド・マン」という作品を天井から吊るのに苦労している、足場を組んで天井から吊るしているという場面です。写真が１枚しかなくて恐縮なんですけれど、最終的にはこちらの右のような形できれいに収まりよく展示をされています。ただ、当館は床面積がだいぶ狭いので、もっとよりカオスな、混沌とした状態で福岡アジア美術館の作品を見せていく形には、最終的にはなるかなと思います。

左側なんですけれども、この開催が、初日の５月１２日に総合開会式が行われまして、その総合開会式に参加したお客様だけではなく、近隣のお客様がかなりたくさんこの日に観覧にいらっしゃいまして、この翌日の中国新聞にカラーで、このように表現していただくことができたという写真ですね。ブリキにペンキで絵を描いたリキシャの装飾が壁に飾られている様子が紹介されています。

当館での展示自体は、まだまだ先になるんですけれども、当館の間にある四日市市文化会館さんですとか、上田市立美術館さんでの展示を参考にさせていただきつつ、一番最後の展示会場という、ある種のそういう利を生かして、なるべく集大成のような形でよい展

示ができるように心がけていきたいと思っております。

最後に、先ほどの笹川治子展の説明のときに少し飛ばしてしまったんですけれども、今後の教育普及活動としましては、笹川治子展の際に６校の小学校が鑑賞教室のために来校予定です。うるおうアジア展には２校が来校予定です。

先ほど河上のほうから話がありました、自分の一番古い記憶を掘り起こすというアンケート企画も、実は来校する６校の小学校の幾つかに話を打診していまして、その中の美術の先生、図画工作の先生からは、ぜひそのイベントに参加したいという前向きなお声をいただいているので、鑑賞教室の事前授業として笹川治子展に関わっていく形になるのかなと思います。

また、別途で職場体験学習実施を希望されている小金井市立小金井第二中学校から連絡をいただきまして、７月上旬に３日間、開催を予定しております。

以上です。

【鉄矢会長】　今、事業予定のほうが終わりましたけれども、これはそのまま、次第は予算までいっていますが、質問は１回切ったほうがよろしいですか。

では、ここで１回切って、質問と御意見等がありましたら、よろしくお願いします。

笹川治子さんのところの、今、学芸員からの説明の中で、中村研一のエスキースのスケッチなんかが、何を書いているか分からないというような感じの表現だったんですけれど、本当は分かっているのを笹川治子さん側に寄せてしゃべらないほうがいいような気がしていて、飛行機が書いてあるし、鉄条網が書いてあるし、そういうことはやっぱり寄せないほうがいいと思うんですね。寄せて、向こうがもあもあとしているものがあって、こっちももあもあと、もちろん見えることは見えるんですけれど、見えるねって言って寄せちゃうと、それは僕は、中村研一は自分の中のスケッチとしては解釈しているので、ちょっとそこは同意しない解釈だったんです。向こうのものと併せて書くときに、何か寄せた解説にならないほうがいいだろうというふうに思っています。

それから、参加型ワークショップはすごく面白そうだなと思っていて、一番難しいのはプロセスの発信だと思うんですよね。一番面白いところなので、終わってこれがそうでしたというと、みんなは何でそれをやっていたのを教えてくれなかったのという感じがするぐらい、面白いんじゃないかなと思っていて。

【河上学芸員】　アンケートに関しては、アンケートを様々な場所に配架予定ではあるんですけれども、それに加えてねそのアンケートをポストに戻せる回収箱みたいなものも

設置予定なんです。今、予定しているのが市役所の４階、コミュニティ文化課のところ、多分、市役所の入口とかにはなかなか置くのが難しいということだったので。

【鉄矢会長】　　そっか。私のプロセスは多分、そのアンケートを読み取っている笹川さんの様子を見たい。それを読んでいる笹川さん、要するに、その笹川さんが何をするんだろう、それで何を考えるんだろうというところが、一番アートが生まれる瞬間の面白いところのような気がするので、そのアンケートを回収するプロセスなんかを別にそんなに見たいわけじゃなくて、そのアンケートを読んで、頭をひねる姿を見ているというのがちょっとずつ見えていると、みんな自分の出したアンケートがどうなんだろう、どういうふうに解釈されるんだろうとか、行きたくなる原動力になるような気がするという意味です。

【河上学芸員】　　作家さんのほうで、その作品のプロセスを視覚的に見せるというのは、どういう方法があるかというのは探れるかなと思うんですけれども、今回はその１つとして、さっき申し上げたとおり、アンケートを回収して、その中から選ばれたものに限ってしまうんですけれども、そのアンケートが作品の一部になるという仕組みを今回考えていらっしゃって、なので、６月の半ばとか頭には、そのアンケートを回収して、第１回は７月に回収をし、そこから制作プロセスに入っていくわけなんですが、それがどういう形になるかをここで言っていいのか……。

【鉄矢会長】　　いや、内緒なら言わなくていいんです。結局……。

【河上学芸員】　　それがちゃんと作品になりますというようなところも含めて、アンケート用紙のほうには全て記載はしますし……。

【鉄矢会長】　　そういうのは書いてあるだろうなと思っていて、結局、最後は会期に来た人が……。

【河上学芸員】　　そうですね。それが作品化は随時ではないんですけれども、何回か回収のタイミングがあるので、１回の回収だけではなく、２回目の回収でまた作品がどんどん更新されていくという仕組みになるので、会期中もずっとこの思い出集めというプロジェクトに関しては継続的にずっと続くという仕組みにはなっているので、スパンとしては６月の頭から会期１１月まで走れるという、ただ、いろいろ広報の仕方はとても限られているので、そこら辺は今ちょっとコミュニティ文化課と一緒に練っているところです。

【鉄矢会長】　　彼女の意図とは合わないかもしれないけれども、終戦記念日もまた挟んでいますもんね。だから、本当に作家と学芸員がガチでぶつかっていくことも面白いのかもしれないかなと思います。

【原田委員】　　このワークショップは面白いなと思うんですけれども、もうちょっと教えてほしいのは、アンケートというのは、あなたの思い出を聞かせてくださいみたいなアンケートなんですか。

【河上学芸員】　　実は、気軽にできるようなアンケートではなくて、お子さんから年が上の方まで幅広く参加いただけるという間口の広いアンケート企画なんですけれども、とにかく自分の知る限りの古い記憶を掘り起こすというのがまずテーマとしてあるので、小さいお子さんとかは、例えば自分の周りのおじいちゃんとか、ひいおばあちゃんとかにインタビューをして、それをテキストに起こしていただいて、それをアンケート用紙に書いていただく。さらにそのテキストを基に画面に絵を描いていただくという、２つ段階の踏むような、アンケートというより、ちょっとワークシートに近いようなものなんですけれども、それをテキストのほうは音声の作品として回収をして、展示室内で発表して、描いていただいた絵は展示をするという形で、本当に作品の全体がインスタレーションにはなると思うんですけれども、１つの空間、部屋がその作品、そのプロジェクトに関連した作品になるというようなものです。なので、今、お子さんの話をしたんですけれども、お子さんだけではなくて、御自分の本当に古い思い出というのも、もちろん掘り起こしていただくということで参加していただくのも大歓迎という形で募集をしようかなと。

【鉄矢会長】　　どのようになるか想像ができない。

【坂井委員】　　危惧するのは、ハードルが高くて数が集まらないんじゃないかしらとかというのは、ちょっと危惧しちゃいますけれどもね。

【河上学芸員】　　そうですね。そういうところもカバーできるかなと今期待しているのが、本当に鑑賞教室で笹川さんを見に来てくださる小学生の４年生の皆さんが、いつも事前授業をして鑑賞教室に来てくださるので、事前授業でこのアンケートを使ってもらえないかというところで、今、積極的にぜひというお返事をいただいているところなので、そういうところで集められたらなとは思っていますが、そうすると小学校だけが対象になってしまうので、また違って、いろいろな施設に声をかけて、積極的にアンケートを撒いていけたらなと思っています。

【原田委員】　　最終的にどういう作品が、作品は笹川さんが作られるわけですね。ちょっと想像がつかないんだけど、それと、今回の展覧会のテーマとはどこかでリンクするんでしょうか。

【河上学芸員】　　この作品に関しましては、笹川さんのライフワークみたいな、思い出

集めプロジェクトというのが、彼女が少し前から始めたものなので、笹川展の関連イベントというところで、このワークショップも関連企画のところにリンクしていて、直接的というふうに展覧会の本編とグッとリンクをしているわけではないんですけれども、ただ、緩やかにはリンクしている部分はもちろんあるので、そういったところは見ていただいた方にうまく頼んでいただいてもよいのかなと思いました。

【鉄矢会長】　ほかに御意見等ございますか。新しい展覧会。開催にどう期待するか。

【山村委員】　こっちの「うるおうアジア　―近代アジアの芸術、その多様性―」の構成とか内容というのをぱらぱら見せてもらったんですが、結局のところ、この３章立ての構成を考えたのは誰なんですか。

【西尾学芸員】　３章立てというのは、ちょっと線的になっているという…

【山村委員】　今それがいまいちつかめなかったんで、近代美術と呼ばれるものと、親しまれるポスターとかが含まれるポップアート的なものと、戦争との出会いというものの構成を考えたのは誰で、そのおっしゃるとおり、全体を流れる筋というのは何なのかなと思ったんです。これをぱっと見ても、何かそういうのは書いていないので。

【西尾学芸員】　本当は、章立ての文章があったほうがいいと思っていたんですけれども、ちょっと諸事情により、それを書かないことになりまして、それで、会期を重ねる中で、結局、今の形でまとまったというのが、すみません、お答になってしますんですけれども。ごめんなさい。

やはりどの館でもやりたいことがいろいろあったので、今回は、特に福岡アジア美術館さんの作品の中からどれを選んでもいいよという、かなりフリーダムな素材選びから始まったところがあって、その中で各美術館ごとの大きさ、規模とか、そういったところから必然的に作品が絞られていったところもなどもあります。あと、先ほどお伝えした福岡アジア美術館の収集方針というところから、最終的に今の形に回を重ねてまとまって、しかも、章立て解説がないという形になってしまったんですけれども。

【山村委員】　事情は分かるんですけれど。

【西尾学芸員】　すみません。

【山村委員】　展覧会やるわけなので、それはどう説明するんですか。そういうわけにはいかないでしょう。だって、一般に向けてそうは言えないでしょう。

【西尾学芸員】　一番最初に事務局の上田市立美術館さんが、実は全体の流れについて少し触れているんですけれど、どちらかというと全員の苦労話みたいなところが少し文章

が多いので、それはちょっとあんまり大きな声では言えないんですが、上がってきた文章と、みんなが想定してきたものに若干のそごはあったというところはあります。最初の文章が展覧会の大まかな流れを一応解説するものではあるんです。ただ、執筆期間がちょっと１か月半ほどしかなかったということもあるのか、今のような形になっていて、かつ、章立ての解説がないというところに落ち着いてしまいました。

【山村委員】　　では、やってくれなかったっていう感じなのかな。

【西尾学芸員】　　章立て、章解説は書こうと提案はしました。結果的に今はないというところから、あとはお察しいただきたいという。申し訳ないですけれども。

【山村委員】　　なるほど。事情は分かるんだけど、何らか、無理やりでもいいから、ここなりにこじつけてもいいと思いますけれども。

【西尾学芸員】　　そうですね。そこは各館と相談して、何かハンドアウトのようなものをこちらで作っていいかという話は聞いてみようかと思います。ありがとうございます。

【山村委員】　　それでいいと思います。こっちで、この３つをつなぐラインを、こじつけでもいいから何か考えて、定義して、こういう展覧会ですよということをやったほうがいいです。

【西尾学芸員】　　そうですね。ありがとうございます。

【山村委員】　　よろしくお願いします。

【鉄矢会長】　　そのほかございますでしょうか。

　では、なければ予算のほう。

【事務局】　　私の方から。資料の一番最後の４番になります。

　予算は昨年度に比べて増額のほうから見ていきますと、表の２番目のはけの森美術館の維持関連に要する経費、こちらは裏の喫茶棟の改修費の予算がついたことなどにより増額となっております。

　また、電気料金が大分上がっておりまして、昨年比から大体１．５倍ぐらいにはなっているので、その分の予算というのも増額で通っております。

　表の上から３つ目の、はけの森美術館事業に要する経費というところで増額になった主な要因としては、市町村立美術館活性化事業という、先ほどの「うるおうアジア　―近代アジアの芸術、その多様性―」のほうで、助成金の負担金というものがこちらに計上されておりますので、ちょっと増額となっております。

　また、減額となりました２つの項目なんですけれども、はけの森美術館の運営に要する

経費というところでは、昨年度は１５周年ということで、展覧会が今年より１本多かったという事情もございまして、人件費がちょっと調整で減額となっております。

あとは、表の４つ目の美術の森緑地の維持管理に要する経費というところなんですけれども、こちらは数年に１回、高木剪定の予算がついているんですが、昨年度がちょうど高木剪定の年で、大分高額なものがついていて、それも今年はなくなったんですけれども、その代わりにずっと壊れていた美術館の横の裏に続く小道の柵ですね。あちらの垣根を直す予算が今年ようやくつきまして、今年度中には直る予定になっております。そこがちょっとプラスになったんですけれども、高木剪定が大分高額だったので、見た目的にはマイナスというようになっております。

あとは助成金のほうの御報告をさせていただきます。先ほどの「うるおうアジア　―近代アジアの芸術、その多様性―」のほうが、今年度３００万円ということで予定されております。あとは、笹川治子展のほうでいただきました公益財団法人朝日新聞文化財団芸術活動助成が１０万円。あとは公益財団法人花王芸術・科学財団の芸術文化助成が４５万円の予定です。先ほどちょっとほかの財団のお話があったんですけれども、あちらは笹川さん御自身のほうでいただいているものになるので、市の予算には計上がございませんので、こちらの３本が今年予算として市のほうで助成をいただく予定となっております。

予算の報告は以上になります。

【鉄矢会長】　　ありがとうございました。

【坂井委員】　　質問よろしいでしょうか。

【鉄矢会長】　　どうぞ。私は今、復唱しようとしただけで、アーティストが助成金をもらいながら、ここの活動に関わってくるという形なんですね。何かすごい複雑な形ですねというのをちょっと感じただけで。じゃあ、お願いします。

【坂井委員】　　この前の御説明でもあったとおり、所蔵品展は入場料が２００円。企画展は基本５００円ということでよろしかったんですよね。

【事務局】　　所蔵展のほうが条例で価格が決まっておりまして、企画展のほうは１，０００円以内で設定するのが条例で決まっております。なので、企画展は比較的、そのときの企画の内容とかに合わせて金額を変えております。

【坂井委員】　　ほぼこのところの企画展は５００円でしたよね。

【事務局】　　というのが多かったですかね、最近。

【坂井委員】　　お尋ねしたいのは、それぞれの展覧会ごとに入場料と入場者数と助成金

と足して合わせて、収支みたいなのは企画展ごとに出ているんですか。そんなことはしていないですか。

【事務局】　企画展ごとに人数とかは出しているんですけれども、収支は出していないです。

【坂井委員】　出していないんですか。これは赤だったね、これは黒だったねみたいな、それは特段。

【事務局】　出していないです。

【坂井委員】　なるほど、分かりました。何かビジネスだとそういうのがある。１個ずつ、この催事は当たったね、当たらないねみたいなことをずっとやっていたので、分かりました。それはないんですね。分かりました。失礼いたしました。全体で見るということですね。

【事務局】　そうですね。

【鉄矢会長】　そのほかにございますでしょうか。

鉄矢です。高木剪定の話は、今聞いていて、何年に一回、高木剪定予算を取るというふうに、財務のほうというか、そちらも理解しているんですか。たまたま今減ったのは、高木剪定がなくなったからと。その後、３年後にやっぱり高木剪定を入れるんだというのを向こうが理解していればいいですけど、ただ下がっていったという理解だと、もう一回載せるのは至難の業になるんじゃないかと思うので。

【事務局】　高木剪定については、毎年予算の要求はしておりまして、つくかつかないかはそのとき次第ではあるので、何年に一度というような具体的な取組というのは特にされておりません。いろいろ財政事情もあるかと思いますので。

ただ、高木剪定しなければいけない木の数は大分減ってきて、去年やったので、今年は一桁になってきたので、あと少しかなと。

【鉄矢会長】　東京学芸大学の例を見ると、高木剪定をしないで、高木伐採という手段に出る。安全性という名前で大事な緑地がなくなってくるので、しっかり高木剪定をしておかないと、伸びてしまって危ないから切りますというと、切る予算はつくんだけど、剪定してくれる予算はつかないとかということになる可能性もあるので、気をつけたほうがいいと思います。意見です。

【事務局】　ありがとうございます。ぜひ今年の提言に　いただくと助かります。

【鉄矢会長】　そのほかございますでしょうか。

では最後に（５）その他です。意見交換などあればと思います。いかがでしょうか。

【山村委員】　　山村です。意見じゃないですが、聞き漏らしてしまったのでお聞きしたいんですけれども、笹川治子展の「届けられた色」という副題があるんですが、その意味というのは、どういったものですか。

【河上学芸員】　　「届けられた色」というのは、まず、先ほど西尾のほうから説明があったとおり、今回、戦争画と呼ばれるものの捉え方といいますか、戦争画という絵は絵であるというところが笹川治子さんの今回の展覧会の１つのキーワードといいますか、絵は絵であって、それが戦争画にもなり得るし、それが絵画にもなり得るし、絵というのは色のかけらが集まったものであるという見方ができるのではないかというようなところから、「色」というキーワードがまず出てきて、「届けられた」というところですね、それを絵画として私たちの目の前に現れたときに、それが絵画として届けられるのか、それともプロパガンダとしてメッセージを持って届けられるのか、それは本当にその人の立場や、いろいろな要素が組み合わさって、その絵というものが様々な捉え方が、それを作り上げることもそうですけれども、そういった意味で届けられたというか、「届けられた色」というのが出てきて、あとは軍事郵便の話もさっき出たんですけれども、中村研一の作品が軍事郵便に使われたスケッチというものを当館が持っていて、軍事郵便自体もあります。それを展示して、そのはがきとして戦地から届けられるという、そういった意味合いもあります。

【山村委員】　　なるほど。先ほどはその間にある不確かさというふうに説明されたところが、この副題に込められているということか。

【河上学芸員】　　そうですね。

【山村委員】　　分かりました。ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　もう少し練ったほうが、私もちょっと絵画という作品性とプロパガンダという両面を持っているものだと言われたら、終わっちゃうんですよね。だけど、その両面を持っているんじゃなくて、そこに不確かさと言って、わざとふわふわさせることによって見ていくんだと言ったときに、もう少し、もう二、三個言葉があると、「色」というようなのにフィットするような気がするんですけど。

【河上学芸員】　　両面性みたいな。

【鉄矢会長】　　そう。今、２個しか出てこないので、もう少し項目があったほうが、たくさんの色ということにはつながりそうな気はしました。

【河上学芸員】　　さっきのパワーポイントはかなりシンプルな感じでまとめさせてもらったので、プロパガンダと絵画という二面性というよりも、多面的なところを、展示を通して見ていくというような内容になると思うというか、なります。

【山村委員】　　山村です。これはすごく難しいテーマだと思っています。作家に任せているから、作家がこう言っているからということはもちろんあっていいんですよ、作家の展覧会だから。それはちゃんと紹介すべきですけれど、やっぱり学芸員としても、美術館としても、何がプロパガンダで、何が宣伝で、メッセージで、何がどういう行為をもっていてというところと、それから、作品として届けられるものが主観に関わるのか、ある客観性とか、それは歴史的にどうだったのかとか、すごく意識したほうがいいと思うんですよ。

特に今はもうロシアのプロパガンダが YouTube だとかに溢れている。すごくアクチュアルな話。ちょうど今日、Ｇ７を広島でやっていますけれども、１つの出来事についても、今でも、現代でもすごく両陣営で全然違うメッセージがくるというような現代の中で、この展覧会をやるということに対して、はけの森美術館の学芸員としてはこう思うとかということもやっぱり問われるというふうに思われますので、そこはちゃんと持っていてほしいんですね。もちろん作家のメッセージは最初にあるんですけど。

【鉄矢会長】　　学芸員としての意見は大事だと思っています。応援します。

【原田委員】　　発言していいですか。

【鉄矢会長】　　はい。

【原田委員】　　中村研一自身が、プロパガンダとしての仕事と、画家としての絵画の間で揺れ動いているみたいなね、気持ち的に自分はどっちなんだろうと、思ったか思わないかは分からないけど、想像するにですよ。だから、そういう、さっき不確かさという言葉もあったし、確か揺れ動くという言葉もあったと思うんですが、そういう感じがあるといいかなというふうに思いましたね。「届けられた色」だと、やっぱりちょっとあっさりし過ぎている、そういう感じがいたしました。

【山村委員】　　笹川さんはその辺を調べて、中村研一自身が書いた言葉だとか、相当コレクションしているんですか。

【河上学芸員】　　相当コレクションしています。資料を念入りに調べたりということもされています。先ほどの現代のことについても、やはりそれは避けられないところで、作家として避けられないというところで、新作でそういったところが見えてくるんじゃない

のかなと。

【山村委員】　　学芸員も顔負けに調べますからね。期待していますよ。

【鉄矢会長】　　あと、先ほどあった絵画の解説、絵画ってこうだよ、インスパイアされて中から出てくる。あれももう少し膨らませて、結局、昔はパトロンがいて、パトロンが書いてと言ったものを描くというのも絵画のジャンルにあるわけなので、近代、現代になってきて、自分の描いたものを描くという人が出てきているとか、あと、今の、それこそやっているアクションをシリーズ化して、アートを作っていかなきゃいけないって、思い出のかけらシリーズみたいなことをやっている方がどんどん増えた時期というのがやっぱり、自分がやるんじゃなくて、誰かのものをこうやって仕組みとして、自分がアート活動を続けるための仕組みをつくっていくという動きが出てきている。そういうのも学芸員として客観的に、アーティスト信奉じゃなくて、アーティストさんを立てることは立てるんでしょうけれども、やっぱりそこは研究者としてのクールな切り口をぜひ入れてほしいと思います。

【河上学芸員】　　ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　ほかに。

【坂井委員】　　ちょっとよろしいですか。先日、海の展示会を拝見しに行ったときに、こちらを私初めて見たんですね。このリーフレットを。これはいつ発行されて、これからの、１、２があるんですけれど、どういう予定で今後続くのかなと思いまして。面白いですし、すごくいい出来、かわいいしみたいに思ったんですけど。

【西尾学芸員】　　すみません。実はそちら……。

【坂井委員】　　ちょっと御説明が、お聞きしたことがなかったので。

【西尾学芸員】　　２は、実は今年の３月下旬に納品されたもので、皆さんのテーブルに配るのを失念しておりまして、すみません。去年度とその前の年は、そういったその美術館の周辺の環境ですとか、中村研一を親しみを持って紹介する、１５周年ということもありまして、去年度は１５周年ではないんですけれど、２年連続で親しみやすいパンフレットを作る余力があったんですが、それは先ほどのお話にもあったとおり、予算次第というところもありますので。

【坂井委員】　　じゃあ、これは美術館事業に関する経費に入っているんですね。

【中村学芸員】　　いえ。厳密に言いますと、そちらは美術館の活動というより、この辺りの文化的な魅力を発信するという、そういうほうの予算で出てきているものなんですね。

１、２と、あたかも最初から計画したように書いてありますけれど、たまたまそういうふうに地域の魅力を発信する予算というのがあった年に、ただそれが取れたというので１つめを作って、２回目もトライしたら取れたから作って、あたかも最初から計画していたみたいに書いてあるという、実はそういうラッキーが２回続いたというふうに。

【坂井委員】　　じゃ、ラッキーが２回で終わっちゃったという感じですか。

【中村学芸員】　　今のところ３回目を待っているところです。

【坂井委員】　　なるほど。面白いですよね。見た目もかわいい、楽しいですし、すごく良かったと思います。

【中村学芸員】　　なので、そういった形で、実は計画を立てて作られたというよりかは、取れたから作るぞで作ったものなので、なかなか事前に御案内ができないということで。

【坂井委員】　　なるほど。何だか突然、え、こんなのあるんだと。そうか、３月ですね。じゃあ、本当にできたばっかりだったんですね。

【中村学芸員】　　そうですね。

【坂井委員】　　分かりました。そうすると、置いてあるのは美術館の出入口だけなんですか。もっといろんな人に見てもらったらいいのになとすごく思ったんですけれど。

【西尾学芸員】　　駅とかにも配布しています。

【坂井委員】　　駅とかにも。

【西尾学芸員】　　駅に置いておくとすぐなくなってしまうので、ちょこちょこと気づいたときに美術館の職員が足して。

【坂井委員】　　ちょっと人目を、ちょっと寄ろうかなと思わせる感じですものね。分かりました。じゃあ、３回目のラッキーを期待しています。

【鉄矢会長】　　ラッキーが来れば来るで大変なんでしょうね。急に降って湧いて出る。

【中村学芸員】　　テーマを考えなきゃいけなくて。

【坂井委員】　　そっか。それはありますね。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

　では、そのほかなければ、事務局から議事録校正についての説明をお願いします。

【事務局】　　前回御出席いただいた方については、お手元に置かせていただきました。６月末ぐらいまでに、市のほうにお戻しいただければと。

【鉄矢会長】　　６月末ですね。よろしくお願いします。

　続いて、次回の会議日程について、ここで決めることができますでしょうか。

（日程調整）

【鉄矢会長】　９月２２日、１８時３０分からということで、よろしくお願いします。

ほかに何かありますでしょうか。なければ、これで、はけの森美術館運営協議会を終了いたします。お疲れさまでした。

――　了　――